



～小学生の部～

1 「みはる隊」に見守られながら

御原小学校 6年
伊奈 耕ノ介



ぼくたちは、「みはる隊」の人といっしょに学校に行っています。

「みはる隊」とは、車の通りが多いところや危険なところなど、通学路の途中に立って、毎朝、ぼくたちの登校の安全を見守ってくださる、地域の方のことです。そして、この活動はボランティアで集まった方で行ってあります。

「みはる隊」の方たちは、いつも優しく接してくださるので、毎朝学校に通うのが、とても楽しく感じます。

この「みはる隊」の方たちには、すごいところがあります。それは、登校班に来ていない人がだれなのか、分かることです。人数が多い登校班は、班長でさえメンバーの名前を全員覚えるのが大変なのに、いくつもの登校班の子どもの名前を覚えているので、「すごいなあ」と思います。しかも、登校の時に、何人来ていないか分かかっていて、実は登校班のことを一番知っているのではないかと思います。

「みはる隊」の方が、

「私たちのやることは、子どもたちを怒ったりすることではなく見守ること」

とおっしゃっていたと、母が話してくれました。それを聞いてぼくは、うれしくあたたかい気持ちになりました。

そして、ボランティアで、毎朝一緒に学校まで歩いてくださる方もいて、とても感謝しています。

このような毎日の体験から、ぼく

は、「ボランティアは、人をうれしい気持ちやあたたかい気持ちにしてくれる」ことがわかりました。「ぼくたちにもボランティア活動ができないか」と思い、自分たちがしたことを振り返りました。夏休みのラジオ体操が終わった後に道路のゴミ拾いをしたことや、子ども会で地域の神社の草取りをしたことを思い出しました。「ボランティア活動はしたことがない」と思っていたけど、自分の住む地域をきれいにする活動を行っていました。みんなで協力して、住んでいる人のためになることをしていたのです。そして、ぼくは、ボランティア活動をしている人も、あたたかい気持ちになることがわかりました。

他にも、ぼくたちの学校には、BBクラブという、放課後の活動があります。BBとは、遊びの「び」と学びの「び」をとったもので、ここにもスタッフとして、多くのボランティアの方が来られています。遊びのときは、ルールを守っているか、危険なことはしていないか、けんかをしていないかなどを見守って、いけないときには注意をしてくれます。学びでも、分からないところを教えたり、できるとほめたりしてもらえます。スタッフの方は、自分の空いた時間で見守りをして、遊びや学びの環境を作っているのです。このように、BBクラブも、ボランティアの方が支えています。

地域のボランティアの方のおかげで、ぼくたちが地域で過ごすことができます。安全・安心に生活できるのは、ボランティアの方の支えがあることに感謝し、自分もできることに少しでも取り組んでいきたいと思えます。



2 いいところ見つけを広げよう

のぞみが丘小学校 6年
西田 奏音



みなさんは、誰かのことを「きらいだ」と思ったことはありませんか。誰かのことを

「苦手だ」と思って、さけたことはありませんか。今、毎日のようにテレビで流れているいじめのニュース。私は、この誰かのことを「きらいだ」

「苦手だ」と思う気持ちが、いじめの原因の一つになるのではないかと考えます。でも、私は、この気持ちは変えられると思うのです。一人一人が身近な人のいいところに目を向けて、個性を認め合えるようになることが、みんなが安心して過ごすことができる社会への第一歩だと考えます。

私がいいところ見つけが大切だと思うようになったのには、きっかけとなる出来事がありました。以前、ある一人の男の子に対して、大勢の女の子が無視をしたり、いやがらせをしたりしていることがありました。「あの人がずっと話しかけてくるの、うざくない。」

「あの人、いつもいやなことしてくるやん。」

とひどい言葉が飛び交っていました。その時、私は、周りの空気に流され、それを止めることができませんでした。

でも、その子の気持ちを考えると、きっとすごく悲しくて、くやしかったのだろうと思います。後からふり返った時、私は、周りの人も自分もその子の短所にばかり目が行ってしまっていたことに気づきました。もっとその子のがんばりやよさを見つけて、周りの友達に伝えていけば、少しでもその子を傷つけずにすんだかなと、

深い後悔が私の心に残りました。そして、この時から、私は友達のいいところに目を向けていこうと考えるようになりました。

私は今年、クラスの友達のいいところを見つけたらすぐに、ノートに記録することを一学期から続けています。これがそのノートです。毎週最低でも一回は、書くようにしています。時には、クラスの友達全員分のいいところを書いたり、クラス全体のいいところを書いたりすることもあります。初めは、友達がしているのを見て、まねをするところから始めました。いいところを見つけよう意識して、友達を見ていると、今まで気づけなかったことが見えてきました。掃除の時間にしゃべっている人一人一人に声をかけてくれていた友達。運動会の応援団で、みんなが声を大きく出せるように、どうすればいいかを一生懸命に考えていた友達。友達の顔色の変化に気づいて、体調を気づかっていた友達。初めはなかなか見つけられないこともあったけれど、意識して続けていると、友達のよさがたくさん見えてきました。そしてそれが、日常になっていきました。

ただ、自分が苦手だと思っている人の見方を変えるのは、難しいと感じている人もいるかもしれません。私もそうでした。どうしても、今までに自分が思いこんでいた悪い印象が頭からはなれず、短所ばかりに目が行ってしまうのです。

私には、少し前まで「苦手だな」と思う友達がいました。小さいころ、その友達が暴力をふるったり、授業中にうるさくしたりしていたことがいやで、そのイメージをずっと引きずっていました。でも、いいところ見つけを続ける中で、その友達をちがう視点から見ることができるようになりました。みんなをまとめて引っぱ

ってくれるところ、たくさん発表をしているところ、いつも話し合いでアイデアを出してくれるところ。その友達のよさに気づくと、自然に「苦手だな」という気持ちが薄れていきました。そして、その友達に私も助けられていることに気づくことができました。

人には、それぞれ、短所と長所があります。その一人一人のちがいを認め合える社会こそがみんなが安心して過ごせる社会だと私は考えます。そのためには、周りの人の長所に目を向け、それを伝え合うことが大切です。時には、本人は、短所だと思っていることでも、他の人から見れば、長所になることもあるかもしれません。だから私は、これからもいいところを見つけを続けて、周りに広げていきたいです。みなさんも、今日から、一日一つのいいところを見つけ、始めてみませんか。

3 外国の方との関わり

三国小学校 6年
後迫 健太



みなさんは、この小郡市に、今どれくらい外国の方々が住まわれているか知っていますか。小郡市には、現在約千人の外国の方々が生活しています。ぼくは、このふるさと小郡の未来がよりよくあるために、小郡に住まわれている外国の方々と関わるきっかけを増やし、おたがいのことを知り合うことが大切だと思います。そのためには、おたがいのことを助けあえる仲間だと思うことが必要です。ぼくは、これが小郡市の発展のための第一歩であり、国際協力にも大きく

つながってくるのではないかと考えます。

登校中や下校中、また、休日などに車の中から外を見たり、歩いたりしている時、たくさん外国の方が自転車でどこかへ出かけているところを、何度も見かけたことがあります。ぼくはその時、大勢で出かけている外国の方々の中に、日本人が一人もいないということに気づきました。その時、ぼくがその外国の方々にあいさつをすると、

「おはようございます。」
と上手な日本語でていねいにあいさつをしてくれ、表情もものすごく笑顔でした。それまで外国の方々は、少し暗く表情はかたそうに見えていたけれど、ぼくがあいさつをした後は、表情がとてもやわらかく笑顔になりました。このことから、声をかけてもらってうれしそうだったので、日本人ともっともっと仲良くなりたいのではないかと感じました。

また、イオンなどのショッピングモールに行くと、外国の方が困っているすがたを何度か見たことがあります。なぜ困っているのか。ぼくはそう思い、周りを見てみました。するとあることに気づきました。それは日本語を英語に訳したものがとても少ないということです。日本人だけが楽しめることはまちがいだと思います。ぼくは、日本人も外国の方々も楽しめるよう、もっと日本語を英語などに訳したものを増やすべきだと思います。

ぼくは、小郡から日本全体にふくらませて考えるため、国際協力に関する本を読んでみました。すると、日本で働いている外国の方々は約百四十六万人もいることが分かりました。その逆に、外国で働いている日本人は、約百三十五万人もいるということも分かりました。自分の国のため

だけでなく、外国の方々は日本の未来のために、日本人はその国の未来のために働いているのだと感じました。だから、ぼくは日本人も、外国の方々も、それぞれの国の未来のために働いているという共通する仲間なのではないかと考えました。そして、そんな仲間のことを、日本人である僕たちが、もっと支えていかなければならないのではないかと感じました。

ただ、外国の方としゃべったり、コミュニケーションをとったりすることはとても難しいことです。「外国の方としゃべる」や「コミュニケーションをとる」と簡単に言っても、実際に行ってみると簡単ではありません。ぼく自身、外国の方に急に話しかけられて、何とか対応した経験があります。ぼくが五年生の時、友達と遊んでいたら、外国の方に、

「近くにコンビニはありますか。」と聞かれました。ぼくたちは考え、「コンビニ」という単語があることに気づきました。そう気がついたぼくたちは、絵で地図をかいて外国の方にわたすと

「ありがとう。」と言われ、その時はとてもうれしくなりました。このように、外国の方が言っていることを全て聞き取らなくてもいいと思います。自分が知っている単語を聞きとったり、自分の知っている言葉を使ったりして、聞きとったことがあっているか、身ぶり手ぶり、ジェスチャーで表したり、絵でかいてみたりして確かめればいいと思うのです。

それでも、言葉に困っている外国の方々には、まだまだたくさんいると思います。そのような人のために、日本語を学ぶことができる日本語教室や外国の方向けのテキストなど、日本語を学べる手段がたくさんあるこ

とを最近知りました。それを紹介している本には、いっしょうけんめい学んでいる外国の方々の写真がたくさんあっていました。そこで、ぼくたち日本人もいっしょうけんめい外国の方々の言っていることを聞き取ることができれば、コミュニケーションがさらにスムーズになるのではないかと思います。

このようにして、もっと外国の方との関わりを増やしていきたいです。ぼくにできることは、困っている外国の方を見かけたら、積極的に声をかけることや外国の方の言っていることをいっしょうけんめい聞き取るように努力することです。少し難しいことですが、それがおたがいをよく知ることにつながり国籍を越えた仲間を増やし、ふるさと小郡の未来をよりよくすることにつながっていくと思います。

4 笑顔あふれる

世の中になるために

味坂小学校 6年

田中 陽菜



「それ分かる。きつかったんだね。」これは、私が救われた大切な言葉です。今では、周りの人たちが困っていたり、落ち込んでいたりする時、私もこのような共感する言葉を使っています。なぜなら人は、共感されると安心してうれしい気持ちになるからです。そして、下を向いていた顔が上げられるようになり、暗かった顔が笑顔にもどります。私は、相手を丸ごと受け止めたり、共感したりすることでだれもが笑顔あふれる世の中につながると考えます。このような思いになったのは、ある出来事がきっかけで

した。

私は、昔から声が高いことがコンプレックスでした。ある日、友達から、「その声わざとたかくしてるの。」とか、「かわい子ぶってるの。」などと言われました。そう言われたことで、ますます自分の声がいやになり、周りのみんなも、私の声のことをおかしいと思っているに違いない、と考えるようになり、気がつく、しゃべる声もだんだん小さくなっていました。

そんなある日、思い切って、このことを信頼している友達に打ち明けました。すると、

「それ分かる。声わざと低くしてるのって、私も言われることあるんだ。」と言って、私のことを丸ごと受け止めて共感してくれました。私は、「分かってくれるんだ。」と感じ、その言葉に心から救われました。このことがきっかけとなり、自分の声を安心して出せるようになりました。そして、受け止めたり、共感したりすることは、周りの人を笑顔にするんだと実感しました。この友達とのやり取りがあったから、自分も、相手を丸ごと受け止めたり、共感したりすることを、意識するようになりました。

それから、一年ほど経ったある日のことです。友達同士が気持ちのすれ違いからけんかをしていました。その友達は、二人で一緒に祭りに行く約束をしていたのに、一人が家族の急な都合で、一緒に遊びに行けなくなってしまったのです。どうして行けなくなったのか、そのわけを友達が話した時には、相手の子は、

「全然いいよ。」

と答えていました。それなのに、翌日に会った時には、腹を立てていたそうです。そのため、友達はとても落ち込んでいました。

そこで、私はその友達に、

「どうしたの。」

と、たずねて、友達がしゃべることに対してうなずいたり、

「そうなんだね。つらいよね。」

と、言ったりして、受け止め、共感し続けました。すると、友達は少しずつ笑顔を取り戻していきました。その時、「私にもできるんだ」と思いました。

ただ、中には相手と同じ経験をしたこともないのに、共感なんてできるわけないと思う人もいるでしょう。でも、自分のことを気にかけてくれたり、分かろうとしてくれたりしたら、それだけでもうれしい気持ちになるのではないのでしょうか。私だったらとてもうれしい気持ちになるし、安心感を得られます。つまり、共感できなくても、受け止めることができれば、相手も自分も笑顔になることができるのではないかと思います。

自分も周りの人も笑顔になれる世の中がずっと続くために、私たちができることは二つあると考えています。

一つ目は、困っている人に気付くことです。そのためにも、周りの人たちの表情をよく見て、みんなと関わり、相手を知ろうとすることです。

二つ目は、進んで声をかけ、否定をせずにながきながら話を聞くことです。そうすることで相手の人は、自分を丸ごと受け止めて、共感してくれていると感じることができます。

私は、この二つのことをみんなに広げていくことで、誰もが笑顔の世の中につながっていける、と信じています。

まずは、私と一緒に相手を丸ごと受け止め、共感することから始めてみませんか。



5 認知症の人と 共にすごせる未来へ

大原小学校 6年
児玉 羽音



ここにいる皆さんもご存じだと思いますが、今の日本は、少子高齢化社会になっています。それに加えて認知症の人も増えていきます。驚くことに、一部の地域では、家族に自由を奪われている認知症の人もいると聞きました。どうして、認知症の人の自由を奪うのでしょうか。わたしは、外で自由にしてあげればいいのと思いました。それは、ふつうの人と認知症の人が、外で共にすごせる未来に必要なことだと考えたからです。

そのために、まずはしっかりと認知症のことを分かっておかなければなりません。これが認知症の人と共にすごせる一つのやるべきことだと考えます。

以前いたまちは、とても高齢者が多く、十年後の全国の高齢者率が42%であるのに対し、47%と5%も上回っています。そして、その半分以上が認知症であると…。わたしは、このまちで認知症の人を守りたい。そのために、わたしにできることは何かと考えました。そして、SOSネットワーク認知症もぎ訓練に参加しました。

SOSネットワーク認知症もぎ訓練とは、プロの方の対応の仕方や接し方などを学びます。そして、まち全体を使って、声かけをしながら認知症役の人を見つけ出す、というものです。認知症の対応として「行動や考えを否定してはいけないこと」「話に耳を傾け受け止めること」が大切なのだと言われました。実際、わたしの

ひいおばあちゃんも認知症で、私がお会いに行っても、「仕事をしている人」だと思い、他人行儀な話ばかりでした。それでも、認知症の人にとっては、分かっているつもりで話しているので、否定してはいけない、間違っただけを言っていたとしても受け入れることが大切だと思い、ひいおばあちゃんと接しました。

ただ、認知症の対応の仕方を知ったところで、実際に声掛けをしたり、否定せずに接したりすることができると思える人がいるかもしれない。しかし、認知症であろうとなかろうと、わたしたちは毎日いろんな人と接していると思います。ですから、もぎ訓練に参加し、様々な場面をシミュレーションし慣れておくことが大切だと考えます。これが認知症の人と共にすごせる二つ目のやるべきことだと考えます。

認知症の人が、共にすごせる未来にすること。家族に自由を奪われず外で自由にできることが増えること。そのために、今わたしにできることは、認知症についてくわしく学び、きちんとした対応ができるようになることです。簡単なことではないかもしれませんが、認知症の人と共にすごす未来に向けてやるべきことであり、よりよい未来への第一歩だと考えます。

6 戦争を知り、平和な未来を

東野小学校 6年
里 優花



戦争のない、平和な暮らしがずっと続くこと。これは、より良い未来にしていこうために、何よりも大切なことだと思います。そのためには、戦争の恐ろし

さを知ること。私は、これが平和への第一歩であり、より良い未来への第一歩だと考えます。

私たちは、十月の初めに修学旅行に行きました。その事前学習で、戦争体験者である牟田英夫さんから、戦争のあった頃のお話をうかがいました。そのお話の中の、

「平和な世の中にするためには、まず戦争を知ることが大切だ。」

とおっしゃった言葉が印象に残っています。これは、戦争のおそろしさを知らない、平和の尊さは分からないという意味だと、私は思います。

私は、牟田英夫さんのように、実際に戦争を体験していないので、戦争のことを深く知ったり、うまく伝えたりすることはできません。でも、たくさんの想像力を働かせて考え、「もう二度と被爆者をつくりたくない」

「地球上から、核兵器をなくしたい」という被爆者の方の強い思いを受け継いで伝えていかなければならないと考えました。

修学旅行本番のフィールドワークでは、一本柱の鳥居や長崎医科大学の門柱を見ました。写真で見たのとは違い、爆風や熱線のすごさを実感しました。原爆資料館の展示物の中には、目をそむけたくなるような物がたくさんありました。それらの第一印象は、「こわい。」でした。しかし戦争は、私たち人間が引き起こしたもので、しっかりと向き合っていないといけないと感じました。この長崎に起きたこと、被爆者の方の思いを無駄にしてはならないと思います。

原爆落下中心地で、平和集会を行いました。そして、平和への願いを込めて合唱したり、千羽鶴贈りをしたりしました。この場所で、大勢の方が命を奪われたのだと思うと、いつもより一生懸命歌おうという思いがこ

み上げてきました。すると、それを外国の観光客の方々が、立ち止まって最後まで見守っていました。私はそれを見て、私たちだけが戦争のことを知るのではなく、外国の方々など、もっとたくさんの方々が、原爆や戦争が人間や自然にどのような被害をもたらしたのかを知れば、きっとより良い未来へとつながっていくのだと思いました。

ただ、だれかが戦争のことを知ったり、考えたりするだけでは平和な世の中にはならないと思う人もいるでしょう。しかし、みんなが進んで戦争のことを知り、戦争にならないように何ができるか考え、行動すれば、少しずつ平和な世の中になっていくのではないのでしょうか。

今の平和で、幸せな暮らしがいつまでも続いて欲しい。そして、むごたらしく、恐ろしい戦争が二度と起こらない平和な世の中になっていく欲しい。そのために、今私にできることを考えています。

私は今、学校の運営委員会の活動で、平和コーナーを作って、平和への願いを集めた「平和の木」を育てる取り組みをしています。このように、呼びかけ合ったり、意識して伝え合ったりしていけば、少しずつ、平和な世の中や、より良い未来へとつながっていくと思います。

小学校卒業まで、あと半年。まずは私の一番身近なところから、平和をつくっていくことを考えて過ごしたいです。

私にできることは、教室で起こるけんかをなくすことです。そのけんかのもとには、ほとんどが、口論から始まります。だから、私は、相手の思いを聞き、話し合ったり、自分の言いたいことを落ち着いて話したりするように声かけしていきたいと思っています。

また、自分から進んで声をかけて

いくことも、大切だと思います。私たちの教室では、以前は同じ人ばかりが「静かにしよう。」と言っていて、いい雰囲気をつくり出そうと一部の人が頑張っていました。だから、言われている人たちは、毎日言われているだけで全然変わりませんでした。もっといろんな人が声をかけ合えばクラスの雰囲気はよくなるのに・・・と思いながらも、自分は声をかけていこうとしていませんでした。でも、人任せにするのではなく、自分が変わっていかないといけないと考えるようになりました。

私は、平和な暮らしを身近な所からつくる一人として、これからも「知ること」や「行動すること」を大切に過ごしていきたいです。

7 安全なまちをつくるために

立石小学校 6年
野 菜桜



高齢者事故をはじめとする多くの交通事故がなくなること。これは、世の中の人々が安心して暮らせる社会に欠かせないことだと思います。

ある日の朝、高齢者による交通事故のニュースが流れていました。高齢者の方がブレーキとアクセルを踏み間違えて、建物にぶつかり、その車にはねられた方が亡くなったというニュースでした。私も学校に行く途中、車を駐車しようとしていたおばあさんがアクセルとブレーキを踏み間違えたようで、他の車にぶつかりそうになる瞬間を見ました。おばあさん本人もびっくりした様子でした。私はその様子を見て、私のおじいちゃんやおばあちゃんだったら…と想像し、少し怖い気持ちにもなりました。

私は、家に帰り、さっそく家族にその話をしました。私の家は大家族で、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんも一緒に暮らしています。ひいおじいちゃんは、自分が運転することは危ないことだと感じたようで、免許は自分から返納したそうです。今は、病院に行く時や買い物に行く時は、おじいちゃんやおばあちゃんに連れてってもらっています。でも、おじいちゃんやおばあちゃんも免許を返納する日がくるのではないかと思い、お母さんに尋ねてみると、お母さんは、「おじいちゃんたちが、免許を返納したあとに、車が必要になったときは、お父さんやお母さんが運転するよ。だけど、一人暮らしのお年寄りの方や車を運転できる家族がいらないお年寄りの方は、困ることがたくさんあるよね。」

と答えてくれました。それを聞いて、私は、免許を返納しても、車がないと生活に困ることがあるので、不安や心配に思っているお年寄りの方もたくさんいるのではないかと思いました。

さらに、私たち自身も事故にあわないように気をつけなければならないと強く感じました。交通事故を防ぐために、普段何気なく取り組んでいることの必要性について改めて考えるようにもなりました。それは、毎日の集団登校と地域の行事です。

私の地域、吹上区では、一年中、登校班で集団登校をしています。集団登校をすることで、運転している人からも歩いている私たちを確認しやすいし、私たちも危険に気づいて声をかけ合うことで、事故を減らすことができると思います。また、おまわりさんや地域の防犯ボランティアの方たちが、登校の時、通学路に立ったり、一緒に学校まで歩いてくださっ

たりします。私たちでは気づかない危険なことを注意してくれるので、毎日、安心して学校に行くことができます。

次に、立石校区では、一年に一回、「立石ウォークラリー」という行事があります。これは、小中学生と地域の人たちが一緒に校区を周り、地元の歴史だけでなく、危険な場所を教えてもらう行事です。歩きながら「ここがスピード出やすい所です。」とか「見通しが悪く危険な所です。」といったことを地域の方たちが教えてくれます。私も一緒に歩いてみて、運転する人だけでなく、歩行者である私たちもより一層注意しなければいけないと思うようになりました。このような取り組みも交通事故防止につながっていると気づきました。そして、いつも見守ってくれているおまわりさんや地域の方たちに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私は、世の中の人々が安心して暮らせる社会になってほしいと思っています。そして、高齢者事故をはじめとする多くの交通事故がなくなしてほしいです。今の私たちにできること、それは、今までのように、危険な所や危険な行動について知り、気をつけて登校したり生活したりすること。一緒に登校している低学年の子が気づかないことに私が気づき、声かけをすること。そして家族を含めた、私たちの安全を守ってくださる地域の方たちとのつながりを大切にしていくことです。これから、私も、地域の方たちやおまわりさんと協力して、自分が住むまちを安全なまちにしていけるように頑張ります。



8 あいさつで笑顔とつながりを

小郡小学校 6年
草野 小雪



会場みなさん、こんにちは。みなさんは、毎日あいさつをしていますか。みなさんは、あいさつについて深く考えたことはありますか。今から、あいさつについて自分なりに考えていることを発表します。

あいさつは大切です。それは、気持ちのよいあいさつをすれば誰もが笑顔になると思うからです。みんなの笑顔をふやしていくためにも、あいさつは大切なのです。

私の通学路には、いつもあいさつをしてくださる方がいます。その方は、笑顔で、

「おはようございます。」

「いってらっしゃい。」

と、言ってくれます。その声を聞くとみんな自然と笑顔になって、

「おはようございます。」

「いってきます。」

と、元気にあいさつを返しています。このように、あいさつをしてくれる人が一人いるだけで、朝からいい気分になれるのです。

もう一つ、あいさつがもたらしてくれるものがあります。それは、あいさつでつながりが増えていくことがあるということです。いつもあいさつをしている人を見かけると、「自分もあいさつしよう。」と思い、

「こんにちは。」

と、自分から声をかけます。そうすると、相手の人も、

「こんにちは。」

と、返してくれます。そういうやり取りを続ける中で、知り合いになってつながりが増えていくのです。

そもそも、あいさつとは、中国語で

「心を開いて歩み寄る」という意味があるそうです。つまり、あいさつをしてくれる人は、私たちに心を開いて歩み寄ってくれているのだと考えることができるのです。しかし、そうなると、あいさつをしていない人は、「心を閉ざした人」「たちどまっている人」ということになるのでしょうか。

もちろん、そういう見方もあるかもしれませんが、そう思う人がいるかもしれませんが。だとしても、私は「あいさつをしていない人は心を閉ざしている」や、「たちどまっている」とは思いません。それは、あいさつにはさまざまな形があり、言葉だけのものではないと思うからです。私は、あいさつをされたら、頭をさげるだけでも良いと思います。また、ほほえみかけるだけでも良いと思います。あいさつの仕方を、言葉だけのものと決めつけずに、もっといろいろなことを気にかけてみたほうがよいと思うのです。そうすることで、きっといろいろなことが変わって見えると思います。いろいろなあいさつの代表が、「言葉のあいさつ」というだけなのです。

あいさつは大切です。だから、これから私は、みんなに心を開いて歩みよれるように頑張っていこうと思います。



～中学生の部～

9 人生の選択

宝城中学校 3年

佐久間 たみ



私が、クラスメイトのお母さんに会ったときに

「この前スピーチしたけん、動画よかったらみてね。」とユーチューブにあがっている、一つの動画をすすめてくれました。その動画は「ワクワクから始める未来の種」という題名で、「夢を叶えるために、いろんなことに挑戦してきた」その方の人生のお話でした。

動画を再生してみたら、その動画は私にこんな言葉をなげかけてきました。

「人生の選択に迷ったとき、みなさんはどうやって進む道を決めていますか？例えば、先が見えている安定した道と、先は見えないけれどなんだかワクワクする道。」

私の答えは決まっています。「もちろん、私は安定した道を選びます。先が見えないような道は、なんだか不安に押しつぶされそうで、進んで行こうなんて思えません。」と。そうなんです。私は、いつもすぐに安定した方へと逃げてしまいます。だから今まで嫌なことや、不安なことから、すぐに逃げてしまうそんな自分のことが、あまり好きではありませんでした。逃げることの繰り返しで、向き合おうともしない自分のことが嫌になります。

私は、学生の本分の勉強が、大嫌いです。できることなら、一生勉強なんてしたくないと思っています。提出物は、毎回しっかりと出していました。でも、自分から進んで勉強してい

たかと言われれば、あまりしていませんでした。勉強をあまりしていなくても、テストでは、それなりに点数はとれていました。ところが、夏休みに塾で受けたテストは今までとは違いました。手応えは、まあまああったのですが、結果は想像以上に悪く私は思わず二度見をしてしまいました。そのテストには一年生と、二年生のときの範囲も入っていました。復習なんて、そんなめんどくさいことは、もちろんやっていませんでした。今まで、「勉強なんてしたくない。」と逃げてきた分の内容が、そのテストにはぎっしりとつめこまれていました。しっかりと勉強をしていたら、こんな点数は取らなかったんだろうなと、とても後悔しました。

私は、今年受験生で、人生の大切な選択の真っ最中です。行きたい高校、やってみたいこと、そして将来の夢。まわりの人は、どんどん決まっていっているのに、私は特にありません。でも、まわりの人に置いていかれないように、「はやく決めなくちゃ。」とあせり、真剣に考えずに、「今の私の偏差値くらいの高校でいいかな。」と、適当に決めていました。このときも、私は逃げていました。「将来」や「挑戦」という不安から。

でも、このスピーチを聞いたときに、私の中のなにかが変わったような気がします。

「一度きりの人生、楽しまなきゃもったいない。リスクがあったとしても、いつもワクワクする道を選んでいきます。『生きる』を味わうために。」そうスピーチで聞いたときに、私はハッとしました。私は、いつも「不安だから。」「めんどくさいから。」と、適当な理由をつけて、「人生」に背を向けて、心から楽しめていないんじゃないか、味わえていないんじゃないかと。

逃げてばかりで、「人生」に背を向けて過ごしていくよりも、不安に向き合ってこそ知る楽しさや、喜びの方が、何倍もいいんじゃないかなと思います。だから「やりたくない。」と、すぐに逃げる自分を変えて、「やってみよう。」と挑戦していける自分になっていきたいと思いました。

私は今、適当にではなく、本当に自分が行きたいと思える高校を見つけることができました。その高校に行くために、大嫌いな勉強にも向き合い、自分なりに一生懸命がんばっています。先月のテストの結果は、夏休みのテストよりも点数が高くなっていました。「がんばったかいがあったな、挑戦してよかったな。」と思っています。

私は、自分の人生は、自分の選択次第で良い方にも、悪い方にもなるということを経験することができました。私の人生は、私のものです。だから、逃げてばかりではなく、心から楽しめるように、自分で「これから」を決めていきたいと思っています。失敗や不安、嫌なことにも向き合って、はじめて「本当の幸せ」を感じることができるということに気づいたので、もし今、「先が見えている安定した道と、先は見えないけれどなんだかワクワクする道。どっちを選ぶ？」と聞かれたら、迷わず今後、自分が進みたいと思えた道が、例え先が見えない道だったとしても、恐れずに挑戦していきたいとはっきりと答えることができます。



10 当たり前への感謝

三国中学校 3年
村上 菜穂



みなさんにとって当たり前とはどのようなことですか。当たり前と聞いたら、ご飯を食べることや学校に行くこと、勉強することなどと考える人が多いと思います。私もそれが当たり前だと思って生活していました。

2017年7月5日。九州を大雨が襲いました。私が住んでいる地域は、何も被害はありませんでしたが、朝倉地区では身動きがとれないほど、浸水していました。これは、たまたま朝倉地区ただで、私たちが住む小郡市で起こっていてもおかしくなかったはず。そこで私は、朝倉地区の方々に何かできないかと思い、炊き出しボランティアに参加しました。私はそこで感じたことがあります。それは、ご飯を食べられることが当たり前ではないということです。私は今まで当たり前だと思っていたけれど、ご飯をもらいに来た人が想像していたよりも大勢来ていたことにおどろき、ご飯を食べられることが当たり前ではないと思い知らされました。もし自分が被害にあって当たり前ができなくなっていたら、きっと何事にもやる気をなくしていたんじゃないかなと思います。

私が1年生の時、部活動で高校生と練習させていただく機会がありました。その時、高校の先生が、「当たり前への反対は感謝。」とおっしゃいました。私は、この言葉が忘れられません。この言葉を聞いたとき、前は部活動ができることやご飯を食べられることは当たり前のことだと思っていました。しかし、部

活動など当たり前のことを当たり前のようにしたくてもできない人がいます。その人たちのことを考えると、ご飯を無駄にすることなく全部残さず食べようと思ったし、部活動ができない人たちの分までもっと頑張ろうと思うことができました。部活動ができることやご飯を食べられることなど、当たり前のことが当たり前に行っているのは、誰かが準備してくれたり、私たちが、知らないところで動いてくれる人がいるからです。私たちのために動いてくれている人たちへの感謝を忘れてはいけないと思います。

私がみなさんに伝えたいことは二つです。一つは当たり前のことのようにしているご飯を食べることや部活動ができることは当たり前ではないということです。朝倉地区の方々のように急に当たり前の日常をうばわれ、当たり前のことが当たり前できなくなる日が来るかもしれないということを頭に入れて生活してほしいです。もう一つは、当たり前のことが当たり前に行っていることに感謝を忘れないことです。先程も言ったように、当たり前のことが当たり前に行っているのは、誰かが準備してくれたり、私たちが知らないところで動いてくれている人がいるからです。私たちのために動いてくれている人たちに、感謝することが大切だと思います。してもらったことを次は私たちがして、いろいろな人たちを笑顔にしたいです。

私たちが当たり前のことを当たり前に行えることに感謝して毎日を過ごしていきたいです。



1 1 自分にできること

立石中学校 3年
志賀 優来



私は、中学生になって親のことや家のことを考えるようになりました。その中でお金がかかることが増えていくのがとても申しわけないと思いました。

そう思う大きな理由として、私の親がシングルマザーだということです。私には姉が一人いて私の母親は一人で家のやりくりをしています。母親は看護師をしているけれどあまり大きな病院で働いているわけではないので、毎日働いてとても大変そうです。小学生のころは、ほしいものはほしい、したいことはしたいと何でも言っていたけれど、家の事情が分かるとあまり言えなくなってしまいました。ですが、私の母は私の誕生日やクリスマスなど決まってプレゼントを買ってくれます。私はそんな母の思いがうれしい反面、口には出せないけど本当に申しわけないという気持ちになります。姉は高校生でバイトもできるので自分のものは自分で買うことができます。でも私はバイトもできないし部活をしていたときもこれからの受験に必要なものも親に買ってもらうことしかできません。母は「必要なものへのお金は出すし、あなたがお金のことで気にする必要はないよ。だから、逆にいるものを無理してまでいらんって言われる方が困る。」と言います。母の気持ちを組み取れば、いるものはいると言った方がいいのは分かるけれど私はあまり言い出すことができません。

だから私はこの時期から「できるだけ母に迷惑がかからない道を進も

う。そうしたら母も少しは楽になる」と考えるようになりました。

まず、私は最初に思ったのはお金がかからない高校に行こうということです。高校生になるとどうしても教科書代や新しい制服、施設代などたくさんのお金がかかります。だけど、その中でも私立高校より公立高校の方がお金をかけずに行くことができます。だから、私の一つの理由として公立高校に行くという目標ができました。

そしてもう一つの考えとして将来の職業を安定しているもの、もしくは親に迷惑がかからないものにしようということです。毎日の母の仕事から帰ってきた様子を見ると、とても大変だということが分かるので仕事は全然楽じゃないことは実感しています。だけど、私が母に迷惑がかからない仕事につければ母は楽になると思うので、母も安心できるような将来を目指そうと思いました。

どんな高校に行けばいいのか、どんな職業につけばいいのかまだ分からないことばかりで、なやんだり不安になったりすることが多いです。だけど、私は母が今よりももっと楽に、もっと我慢せずに生活ができればという思いをもってがんばろうと思います。私は母が苦勞していることも本当はとても我慢していることも知っています。その姿をみてきた私だからこそ、母への今までの恩返しができると思います。まださだまっていない目標だけれど、母が今以上に笑顔になってくれることを望んでいます。将来のことや目標だけでなく普段の生活から母を支えられるように家の手伝いや母へのプレゼントなど、できるだけのことをこれからもずっとしていきたいと思っています。母はとても我慢強く優しいので、私が「お母さんに迷惑がかからな

いようにがんばる」と言っても、「自分の好きなことをしていいよ」と言うかも知れません。だけど、母を安心させ笑顔にすることが私の好きなことです。

これからも母を支え支えられながら大好きな母がこれからもずっと笑顔でいられるように一つ一つしっかりとがんばっていこうと思います。それが私のできる最大の恩返しです。

1 2 考え方

大原中学校 3年
安部 拓磨



みなさんは普段、プラス思考で生活できていますか。

プラス思考というのは前向きに考えるということですが、難しくできていない人が多いと思います。私は今までマイナス思考で過ごしていましたが、マイナス思考ではいけないと思い、中学二年生くらいから考え方を変えました。

私が考え方を変えたのは、野球部のキャプテンになってからのことでした。野球部ではこんな言葉が飛びかかっていました。

「だるい」「きつい」「暑い」「眠い」などの言葉が飛びかかっていました。私はその言葉を聞いたときに、「それはそうだな。だけど、だるいとかきついのはみんな同じなんだよな。しかも、そういう言葉を聞くとますます、マイナス思考になって練習も楽しくなくなるよな。」と思いました。このことがあってから私はマイナスなことを言わないように心の中で決めました。

もう一つ私がプラス思考になったきっかけがあります。それはおこら

れたときです。人に直接おこられると、いらっと来る人や悲しくなる人など様々な感情がわきます。私は以前、おこられたことと、自分がやったことを認めて、後でおこられたことを考えてしまい胸が苦しくなったり、悲しい気持ちになってしまうことが多くありました。そんな時に私はこのままではいけないと思い、考え方をプラス思考に変えました。例えば、おこられたら「期待されている」と思ったり、まちがいや失敗をしたときは「失敗は成功のもと」と思ったりしました。そうすると落ちこんだり、悲しくなったりすることが少なくなりました。

私は生活をしている中で心がけている言葉があります。よく言われることが多い言葉です。「できる、できないかではなく、やるか、やらないか」という言葉です。私はその言葉の中の「できる」という言葉を多く使うようにしています。初めに言った「やるか、やらないか」という言葉の意味と合っていません。

しかし、私は「できる」という言葉を使っていると、無理そうなことでも挑戦しようという気持ちになるので、いつも使うようにしています。「できる」という言葉は私のお気に入りの言葉です。

みなさんも悲しいときやつらいときに落ち込まずに、そのことを前向きにとらえて楽しい生活を送りましょう。また、自分を前向きにしてくれるお気に入りの言葉を探してみましょう。



13 心のバリアフリー

小郡中学校 3年
田中 宏政



皆さんは、車椅子バスケットボールの試合を見た事がありますか。普通のボールやコートを使い、車椅子に乗ってプレーするのですが、初めて観戦した私は、激しい動きとスピードで車椅子同士がぶつかり合い、転倒も多く迫力があるプレーの力強さに圧倒されました。

その時に、車椅子バスケットボールを体験させてもらったのですが、座った状態からのゴールリングはいつもより高く、コートはいつもより広く感じられました。同じ場所なのに、視点の違いでこんなにも違って感じられるものなのか、と初めて意識することができました。ある選手が、

「車椅子に乗る障がい者だから何もできないわけじゃない。できる事に挑戦するのを諦めない気持ちが大切なんだ。それが楽しいんだ。」

と話してくれました。さらに

「バスケが好きで、プレーするのは楽しいと思う気持ちは、障がいがあってもなくても皆と同じだろう。」

と言って笑っていました。車椅子で生活する人は出来ない事や周囲の手助けが必要な事があるのも事実ですが、気持ちや考え方、人間としての違いなどはなくて、得意な事・苦手な事があるということで、それは個性の違いみたいなものかもしれません。そう考えていると自分の中で、どこか無意識に作っていた小さな壁が、スッと消えたような気がしました。

小学生の頃、足を骨折していた時に、人混みで危なくないよう、ショッ

ピングモール内の移動に車椅子を使う事を提案されたことがあります。

その時、私はとっさに

「車椅子は恥ずかしいから乗らない」と言って断りました。その時の私は、車椅子に乗る障がいのある人を差別するつもりでいったのではありません。ただ、その時自分にとって、車椅子を使うのは特別な状態であり、人混みの中、普通じゃない事をして注目されたら恥ずかしいと思って言ってしまったのです。

それでもこの発言は、私の中で無意識に、車椅子に乗る人は特別、人とは違う、という偏見があったからではないかと気づかされ、ハッとしました。車椅子に乗って生活している人を傷つけるひどい言葉だったと、今はとても深く反省しています。

偏見はないつもり、悪意はないつもり、そんなつもりはなかったけれど、という発言が障がいのある人を傷つけてしまっている状況は意外と多いのではないのでしょうか。その上これが、意識的な発言になれば、一体どれ程相手を傷つけてしまうのでしょうか。

こんな出来事もありました。あるスポーツの大会で、車椅子利用の方が広いスペースと低い柵で作られている車椅子用の観覧席に来られたのですが、そこには参加チームの保護者が荷物を置いて使えなくなっていたそうです。荷物を移動してもらえよう頼んだのに、その保護者達は、「ここじゃなくて他の場所で見ればいい。」

と言って譲らなかったそうです。この状況を主催者に伝えましたが対応はされず、結局、車椅子の人は会場から去る事になりました。さらにその後、主催者と保護者の言った言葉は、信じ難いものだったそうです。

「車椅子なのに見に来るなんて迷惑

だ。」

これを聞いて私は驚き、とても残念な気持ちになりました。迷惑なのは、車椅子用観覧席を荷物で占領していた人達のマナー違反行為だからです。

せっかくのバリアフリー設備が整っている施設が、利用者や主催者の自己中心的な言動によって、バリアフリーではなくなっていました。その言動は障がいや車椅子を受け入れない固いバリアで、会場や交流する心を閉ざしてしまったのです。こんなひどい事は、二度と起こさないようにしなければいけないと思います。

しかし、もしかしたら逆に、バリアフリーの設備が完璧には整っていない施設でも、そこにいる利用者の手助けや、主催者の理解ある対応や工夫次第で、車椅子利用者にも優しい、バリアフリーな空間にすることもできるのではないのでしょうか。

相手の気持ちを考え、そんなつもりではなかった、という失敗を繰り返さないように気をつけること。自分勝手なマナー違反で人を傷つけたり迷惑をかけないようにすること。一人一人の心がけ次第ですぐにできる人権を尊重する行動を大切にしていきたいと思います。皆の心とマナーがあってこそ、本当のバリアフリーを完成させる事ができるはずです。心のバリアフリーを広げていこうと思います。



～高校生・特別支援学校の部～



14 一つのきっかけ

小郡特別支援学校高等部 3年
稲吉 愛



「今あなたは楽しいですか？」と聞かれたら中学生の頃までの私だったら「楽しくない」と答えていたと思います。でも、今の私は、違った答えを言えます。私は保育園では、絵を描こうとしない、給食では白ご飯しか食べない、全般的に落ち着きがなく、集団で行動することが苦手な子どもでした。それでも、楽しく過ごしていたと記憶しています。

小学生になると、宿題がとても苦手でした。自分では今日こそはやろうと思っても、違うことに気をとられて集中できませんでした。そんなある日、靴箱にもどろうとした時、前にいた3人ぐらいの女の子が「逃げる」と言って、私の前から走り去りました。私は、さびしくて悲しくて、とてもつらかったです。

中学校時代にも、嫌なことがありました。幼なじみ数人からメールが送られてきました。「いつから友達だったっけ？」と書かれていました。唯一信用していた友達から言われた言葉でした。絶望的な気持ちになり、私には、友達は一人もいないのだ。私は一人ぼっちなんだと思いました。

中学三年生のとき、進路を決める時期がせまっていました。私は、自分の夢の実現のために志望校を決め、そこに行きたいと思いました。実は、その頃の私は自分が障がいをもっていることを知らなかったのです。しかし、支援学級の先生から検査を受

けてみないかとすすめられ、受けてみると障がいをもっていることが分かりました。小さい頃から何か人と感じ方、捉え方が違うと感じていました。この時に、なぜいじめにあってきたのかが分かりました。理由がはっきりわかったのはよかったです、私はやはり志望校に行きたいと願い、受験しました。結果は不合格で、仕方なく今の小郡特別支援学校に入学しました。

入学した頃は、人との接し方が分からず、一人で悩んでいました。そんな自分を変えるきっかけは、児童生徒会に入ったことでした。学校全体に関わる活動をみんなで協力しながら、経験していく中で、自分への自信につながりました。尊敬する先輩からの「あなただったらできるよ」という言葉にも励まされました。このように、児童生徒会のメンバーとの会話は楽しく、とてもやりがいを感じる活動でした。そして三年生では生徒会長に立候補し当選しました。

それでもいろいろと心に溜め込んで、悩んだりすることもありました。そんな時、担任の先生は、話を親身に聞いてくれたり、明るく接してくれたりしました。おかげで少しずつ、クラス、委員会、学校というところがとても楽しく感じられるようになりました。

また、進路に迷っていた私は、兄が食事の店を開店し、時々手伝うようになったことがきっかけとなり、調理関係の仕事に就きたい、調理師の免許を取りたいと強く思うようになりました。そこで、学校の先生に相談し、調理関係の実習先を見つけていただきました。そこは、とても雰囲気がよく、ここで働きたいと思える場所でした。そして、実習先から「もし望むならば将来の夢への通過点と思ってもいいから卒業したらおいで」

と言っていたき、跳び上がるほどうれしかったです。

最後に、最初は嫌々ながら入学した小郡特別支援学校でしたが、そこでの一つ一つの小さなきっかけに対して、信頼できる先生や尊敬できる先輩、語り合える友達などとの出会いの中で、自分で決めてしっかりと取り組めるようになりました。とても不安だった卒業後の進路も夢の実現に向けた第一歩ができそうで、今では本校に入学してよかったなあと思っています。みなさんに伝えたいことは、どんな小さなきっかけでも、チャレンジすれば一歩前に進むということです。

これからも自分の夢に向かって、自分らしく一步一步ゆっくりとステップアップしながらのぼっていくつもりです。

15 夢を叶えるために

小郡高等学校 1年
石橋 愛梨



私は今「教員になる」と言う夢を叶えるため、高校に入学してから勉強するとき心がけていることがあります。今日はその心がけていることについて皆さんにお話しします。

その前に、なぜ私が教員を目指そうと思っているかというと、私は昔から小さい子と一緒に遊んだり、話したりすることが好きでした。そして中学2年生位になると、将来は子供と関わる職業につきたいと思うようになりました。そこで「保育士」と「教員」の2つの職業が候補として上がりました。しかし、私にはとても憧れている先生がいます。その先生

は、私たち生徒と一緒に楽しむ時は楽しんで、怒らないといけないときは、自分が怒っている理由を明確にして怒っていただきました。また、授業で理解できていない人を気にかけてながら授業を進めていただきました。私はその先生のような教員になりたいと思うようになり、「保育士」ではなく、「教員」を目指すようになりました。

「教員」といっても小・中・高や科目などたくさんあります。私はその中でも中学校の数学の先生を目指しています。その理由は、先ほども申し上げたように、とても憧れた先生が中学校の先生であることと、今一番好きな教科が数学で、「もっと難しい問題にチャレンジしたい」という気持ちが一番強いことです。また、数学は中学校の内容が理解できていないと高校についていけなくなり、嫌いになる人が増えがちです。私は、少しでもそのような人を減らしたいと思うので、中学の数学を少しでもわかりやすく教えられたらいいなと思うからです。以上の理由から私は教員を目指しています。

私はこの夢を叶えるため、「わからないところこそわかるまで」を自分の目標として勉強しています。脳は、いちどわからないと覚えてしまうと考えようとしなくなる傾向にあるそうです。そして、そのまま解けずに終わってしまうとその先もわからなくなってしまうかもしれません。だから私はわからないところはどうかしてわかるまで考えるようにしています。そのために行っていることが大きく2つがあります。

1つ目は、当たり前ではありますが、教え合いをするようにしています。友人にわからない問題があったときは、答えではなく解き方を教えてあげるようにしています。答えだ

けでは、友人のためにはなりませんが、解き方を教える事は、友人が自分で考えることになり、さらに私自身も再度解き方を確認することにもつながります。また、自分がわからないときには、友人や教科担当の先生、塾の先生に解き方や考え方を教えてもらい、その後自分で解き直すようにしています。

2つ目は、「時間の使い方を考える」です。高校では予習が必要です。また、先生は教科書に載っていない重要なことをおっしゃる時があるので、それを聞き逃さないために、そして授業で1回で理解するために授業で寝ないようにしなければいけません。そのため、勉強時間と睡眠時間を確保し、使い方を大切にする必要があります。さらに教え合いをするならばその時間も取らないければなりません。だから時間を大切にするようにしています。

私はこの2つの行っていることが将来に生かせると思います。教員になったら教えることが主な仕事になります。つまり今、教え合いを工夫して身に付けることができれば、そのまま生かすことができます。また時間を有効に使う事は教員以外の職業でも必要な、人間としてなくてはならない力だと思います。だから今のうちに身に付けて習慣化したいと思っています。

今日のこの発表を機に、将来で生かす力を身に付ける方法を試行錯誤しながら、夢を叶えられるように頑張っていきます。



16 次は私が！

三井高等学校 2年
古賀 次穂



みなさんは将来の夢について、いつごろから考えましたか？

私は、中学校時代、保育士になりたいと思い、福祉教養コースに入学しました。

しかし、今の私の夢は、小学校の先生になることに変わりました。

将来の夢、つまり、将来どのような職業に就くか、将来、どのような自分になるかの目標が、私は夢だと思います。

そして、その夢は、自分が経験したこと、かけてもらった言葉、教えてもらったこと、さまざまな経験の中で、少しずつふくらみ、少しずつ実現にむかう、「なりたい自分になる」原動力になります。

保育士も小学校の先生も、子ども達の成長をサポートすることには変わりはありません。しかし、今の私は、子ども達の成長をサポートだけでなく、子ども達の心に寄り添い、励まし、一緒に次の目標に向かっていく、小学校の先生になりたいです。

そう思ったきっかけは、2つあります。

1つ目は、子ども食堂のボランティアとインターンシップに参加したことです。

みなさんは、子ども食堂を知っていますか？

子ども食堂とは、子ども達が集まって食事をするだけでなく、勉強などを学べる場のことです。私は、去年から、母に言われて子ども食堂に参加しました。最初は、母に言われて、ただ、ついていっただけでした。しかし、回数を重ね、子ども達と関わる時間

が増える中で、子ども達と一緒に、笑ったり、悲しんだり、いろんな気持ちを共有することに、やりがいを感じるようになりました。

今年の夏休み、学校のインターンシップで保育園に行きました。将来の夢だった保育士の仕事を教えてもらえて、毎日が充実した日々でした。しかし、子ども食堂の時のような「一緒になにかを目標にしてがんばる」という気持ちになれませんでした。なぜだろうと、思いながら、別の小学生対象のボランティアに参加しました。そこで、子ども達と一緒に、宿題をしたり、川遊びをしたり、悩みを聞いたりしているうちに、私は小学校の先生になりたいのかな・・・と、思うようになりました。

2つ目のきっかけは、体育祭のチアダンスを担当の先生に教えたことです。

担任の先生は、どちらかというと、覚えが悪く、同じふりをなんどもなんども繰り返して教えました。たった30秒のふりを、1時間以上かけて教えることもありました。

しかし、チアのふりを覚えたいと、暑い教室で練習をする先生の姿を見て、一生懸命に頑張る誰かの力になり、努力した後の達成感を共有したいと強く思いました。一緒に練習した成果を、体育祭で、大勢の人の前で発表し、たくさんの拍手と声援をもらった瞬間、私の将来の夢は固まりました。

去年、私は、自分自身の可能性に挑戦するために、生徒会に入り、そして今生徒会長として、さまざまな行事に関わっています。行事のたびにプレッシャーを感じますが、行事が終わるたびにやりがいや充実感があります。それは、生徒会のメンバーや、友達、先生たちの支えがあるからです。

だからこそ、私は、何かに挑戦したり、努力している人たちの気持ちに寄り添い、背中を押してあげられる先生になりたいと思っています。

そして、子ども達が壁に直面しても、「大丈夫」という言葉とともに、どうやったらその壁を乗り越えられるかを一緒に考え、一緒に解決策を探して、前向きになれるような、支えになりたいと思っています。

今まで17年間、友達や先生たち、家族からもらってきた、たくさんの応援の言葉や、サポートの中で、自分自身が成長してきたと感じられるようになってきました。

次は、私の番です！

辛いことを乗り越えるきっかけになった言葉、支えてもらってうれしかったこと…

今まで私がもらってきた、たくさんのお話を、今度は、私が子ども達に注ぐことが出来る、そんな小学校の先生になりたいです。

ご清聴 ありがとうございます。



～特別発表の部～

17 第39回小郡・三井

少年の船に参加して

のぞみが丘小学校 6年

池田 結衣

私は今回、小郡・三井少年の船に副班長として参加しました。

私の中で少年の船は、初めて家族のもとを離れて違う学校の人達との集団生活を送る場所となりました。副班長に選ばれたけど、1回目の研修の時から、副班長の仕事は何をすればいいのだろうと悩みました。私は、副班長の仕事とは班長と



一緒に班をまとめることだと思いましたが、しっかり班をまとめる為には、班のみんなに注意したり、厳しい言葉を言ったりしなければならぬことがあると思いました。もし、私が注意することで班のみんなと仲が悪くなり、その場の雰囲気壊してしまうのではないかと思ったり、みんなが私のことを嫌いになったりするのではないかと心配なことばかりでした。

だけど、みんなを信じて勇気を出して声を掛けてみると、みんな声掛けにこたえてくれ、いろんなことに一生懸命協力してくれたので、とてもいい研修を送ることが出来ました。

私が、5日間の研修の中で、みんなが成長したと思うことは、あいさつでした。

少年の船では「あいさつ」「団体行動」「5分前行動」「メリハリ」の4か条がありました。この中で私は副班長として、まずは「あいさつ」をきちんとしようと思いました。

本研修の前の事前研修の時、初めて班の仲間と会いましたが、その時はまだお互いのことを知らないの、みんな恥ずかしさがあり、大きな声できちんとあいさつが出来ずに怒られてばかりでした。しかし、あいさつの練習を繰り返すうちに、みんなの声が大きくなり、元気が出てきました。

あいさつを元気にすると、する方もされる方もとても気分が良くなります。

それにあいさつの声ひとつで相手が「今日も元気だな」とか「やる気があるな」とかが分かるようになり、あいさつは人とのコミュニケーションをとる上で一番大切なことだと分かりました。だから私自身が一番元気なあいさつをするよう心掛けました。すると、みんなもだんだん大きな声

が出るようになり、班の結束も強くなって、本研修ではあいさつのやり直しもほとんどなく研修を終えることが出来ました。

次に「メリハリ」をつけることです。メリハリをつけるといっても最初はどのようにいいのかわかりませんでした。

本研修が始まって最初の頃は、旅行に参加しているような気分で班員同士が話に夢中になり、団長や班長が話を始めてもおしゃべりを続けたりすることがありました。このように指示を守れなかったときは、全体責任となり、みんなが怒られてしまいました。それからは班の仲間同士で気をつけるようになり、話を聞くときは聞く、遊ぶときは遊ぶなど、行動にメリハリをつけられるようになりました。

最後に「5分前行動」と「団体行動」です。

団体行動に大事なものは、みんながきちんと決まりを守って行動することです。

そのために大切なことが「5分前行動」です。5分前行動をすることにより、次に何をすればいいのか考える時間が作れたり、その準備をすることができ、他の人に迷惑をかけなくてすむようになりました。

研修中は、この「4か条」を厳しく指導してもらいました。

4か条は、集団生活を送るうえで大切だということが学ぶことができ、今後も忘れないようにしようと思っています。

今回の研修では、エメラルドビーチでは班長を砂に埋めて、人魚の形を作ったり、沖縄の人がアイスを持ってきてくれました。とてもおいしかったです。

夜は、花火をして天体観測もしました。打ち上げ花火の後ろは星空と

海で、ほんとうにきれいで感動しました。

沖縄最後の夜は、班別出し物大会があり、スタッフの方達がおもしろく盛り上げてくれてとても楽しかったです。私達も最後に班で協力して出し物を考え、気持ちがまとまる事が出来てとても良い思い出になりました。

私は、この少年の船で、たくさんのことを学びました。

一つ一つのことに責任を持ち、最後までやり遂げることに。

最初はできないことも、あきらめなければ乗り越えられること。

これは全て少年の船に参加して出会った人達から学んだことです。

おこられてくじけそうになっても「もう一度頑張ろう」と言ってくれた仲間。

私が海で体調が悪くなったとき助けてくれたスタッフの方たち。

エイサーなど沖縄のことを教えてくれた沖縄の人達。

そして、厳しかったけど、とても優しくかった班長。

班長は、班員の体調や気分などを小まめに気づかってくれたり、何でも相談に乗ってくれたりしました。

本当にみんなに出会えてよかったです。

この出会いと少年の船で学んだことを今後も生かしていきたいと思っています。



18 ジュニアリーダー研修会
で学んだこと

小郡小学校 6年
坂井 楓



私は、夏季ジュニアリーダー研修会で、夜須少年自然の家に一泊二日の野外体験に行ってきました。今から、この野外体験で学んだことを発表します。

私が夏季ジュニアリーダー研修会に参加した理由は、自分にとって良い体験になると思ったからです。なぜかという、今、自然災害が至る所で起こっています。野外体験をしているところのような災害が起こった時、野外で泊まることになっても困らないからです。

野外体験の経験を積んでいくことは、とても大切なことだと思います。

私にとって、野外体験は初めてだったのですごくわくわくしました。自分たちでご飯を炊いたり、カレーを作ったりするのは大変なんだろうなどは考えていました。実際にやってみると、予想以上に大変でした。特に火加減をみるのが大変で、火が強すぎるとこげてしまうし、火が弱いとご飯がおいしく炊けません。だから、ご飯が炊けるまでずっと火を見ていました。そして、まきを入れたり、うちわであおいだりと本当に大変でした。でも、苦労してやっとできたご飯はとてもおいしかったです。片付けもまた大変でした。ライスクッカーについた炭が落ちにくく、中で固まったお米がなかなか取れず、洗うのに時間がかかりました。洗い終わったころには、汗やかかった水で洋服がぬれていました。

片付けが終わったら部屋で過ごしました。初めて会う人たちと話すの

は緊張してとてもドキドキしましたが、楽しく過ごすことができました。

次の日は、朝早く起きて自然散策に行きました。外に出ると涼しくて、きりが出ていました。耳を澄ますとたくさんの虫の声が聞こえました。虫たちもがんばって生きているんだなと感じました。自然散策が終わるころには、始まった時より空は明るくなってきました。空がキラキラしてとてもきれいでした。

9時30分から、フィールドビンゴをしました。見たことのない植物や虫がたくさんいました。フィールドビンゴでは、チームのみんなをまとめるのが大変でした。一人が速く行くと走らないといけないし、だれかがいないと困るので、何回も人数確認をしました。ですが、みんなできっしょに問題の答えを考えたり、しゃべったりすることができてとても楽しかったです。ゴールに着いた時には、1時間以上歩いていました。

私は、このような体験ができてとてもよかったです。自分でも、この2日間ですごく成長できたと感じました。私は、初めて会う人としゃべるのが苦手だったけど、初めて会った人たちとも積極的に話すことができてよかったです。植物の葉と葉の間から太陽の光が差しこんできれいに見えたり、虫の声をたくさん聞くことができたりして、改めて自然のすばらしさを学ぶことができました。私は、もっといろいろな種類の虫や花など、自然のことをたくさん知りたいです。

私は、この体験をこれからの学校生活に活かしていきたいし、他の人たちにも自然のすばらしさを伝えていきたいです。私に、このようなすばらしい体験をさせてくださった方々、本当にありがとうございました。